

女性牧畜民のチーズ生産と生活の変容

——中国内モンゴル自治区フバートシャラホショーの事例——

東北大学 何 淑珍

1 目的

本研究では、草原生態保護政策として打ち出された禁牧、休牧、区画輪牧政策によって、牧畜業と牧畜民の生活がどのような変化を遂げたのか、そしてその変化に対して牧畜民がどのような対応を示したのか、その対応の結果として、牧畜地域社会がいかなる変化とげたのかを明らかにすることを目的とする。

2 方法

本研究は、個人の生活と地域社会のあり方との関連という視点から、農家女性がどのような社会的諸条件のもとで、自らの農家生活を築き上げてきたのかという点に焦点を当てた。その調査結果から、農家の食生活の維持が、農村地域社会にいかなる影響をもたらしたかを報告する。

対象地である内モンゴル自治区フバートシャラホショーは、内モンゴル自治区の主産業である牧畜産業を主とした純牧畜地域である。

本研究の調査期間は2008年8月から2013年6月までであり、半構造化インタビューに基づく事例調査である。その際、社会のなかで生きる人々に対して「個人の、生活と行動を眺めて」、「いったい何が彼の生活行動を規律し」ているのかを明らかにする(東 1989:viii)という「聞きがたり」の手法を用いて、女性牧畜民たちの対応が農村地域社会にいかなる影響を及ぼしているのか解明しようと試みた。

3 結果

いわゆる「三牧」政策の実施後、主に次のいくつかの変化が生じた。①放牧形態として、定住放牧から定住放牧+畜舎飼育、「移民村」での酪農経営という新たな形態が現れた。②生態保護政策が牧畜地域の都市化政策でもあり、多くの牧畜民を町郊外の「移民村」に移転させることによって、牧畜地域に大きな人口移動をもたらした。③定住放牧+畜舎飼育形態では搾乳が不可能になり、そこでの女性牧畜民の家事からチーズ生産がなくなった。④「移民村」での酪農経営が行き詰ったことへの対応行動が、そこでの女性牧畜民をチーズ生産用の牛乳提供と生産そのものに専念させる結果になった。⑤これらの結果、女性牧畜民ではチーズ生産に専念する人、チーズ生産の原料である牛乳提供に専念する人、それを消費する人という三つの類型が生じ、相互に依存しあう新たな社会関係が形成された。

4 結論

草原生態保護政策として打ち出された禁牧、休牧、区画輪牧政策への対応の結果、チーズ生産をめぐる女性牧畜民の生活が多様化するとともに、新たな地域ネットワークが形成されつつあることが明らかになった。政策実施などの社会的諸条件の変化のもとで、女性牧畜民たちの対応行動が結果として、自らの生活を分化させ、牧畜地域社会が再編されることになったといえよう。

文献

東敏雄, 1991, 「歴史資料としての聞きがたり」『歴史評論』校倉書房。
フバートシャラホショー統計局編, 2011, 『フバートシャラホショー統計年鑑』. 他